

# 日本母乳哺育学会 ニュースレター

発行 2002 年 6 月 17 日第 1 号

## 日本母乳哺育学会理事長 小林 登

IT時代の現在、インターネットのホームページは、いかなる組織にとっても必須のものとなりつつある。日本母乳哺育学会がホームページを立ち上げることは、したがって、それなりに意義深いものと思う。設立から関係している者として大変うれしい。

日本母乳哺育学会は、はじめは研究会として出発した。15年程前のことである。当時、母乳でわが子を育てようとする母親の数は著しく減少していたが、反面、あまりにも熱心に母乳哺育を進めようとする医療関係者の動きがあり、ある意味で追い詰められている母親達も少なからず出て来た。しかし、母乳哺育は「自然の贈物」であって、子育ての基本とは考えられるものの、それが実施出来ない母親のために、小児科医は脳漿を絞ってミルクを開発し、限りなく良い物にしてきた歴史的事実も十分に理解しなければならない。また、母乳の免疫学的研究も、国内外で大きく進み、新しい知見がつつぎと出て、母乳哺育の新しい意義も考えなければならなくなってきた。

そのような時代背景の中で、子どもの心と体の健康のために、母乳という「もの」ばかりでなく、母乳哺育という人間の「いとなみ」も含めて、科学の立場から研究を進展させる必要があると考えて、研究会を組織した。その後紆余曲折はあったが、2年ほど前やっと学会になることが出来たのである。

母乳哺育の「母乳」という「もの」を科学的に研究する立場には、生化学、生理学、内分泌学、遺伝学、分子生物学、解剖学、組織学などの医学に関係する自然科学があるが、「母乳で子どもを育てる(母乳哺育)」という人間の「いとなみ」を研究するには、社会学、文化人類学、心理学、保健学、看護学などの人文科学も関係する。したがって、母乳哺育学会は、文理融合科学の学会なのである。それゆえに、要素還元論的な立場ばかりでなく、それを取り込み乗り越えて、統合全体論的な立場も必要となる。

学会会員は主として医療関係者であるが、母乳哺育の科学に広く関心を持つ研究者であるならば、どのような専門であろうと、是非とも参加して戴きたい。この学会で得られた成果は、当然のことながら、母乳で子育てしようとする母親に生かされなければならない。そのためにも、正しい母乳哺育を母親に指導する人材の養成をも考える必要があろう。

20世紀は、自然科学が進み、素晴らしい技術を作り、豊かな社会を築いてきた。正に「もの」の時代だったと言える。しかし、20世紀末になって、自然破壊・公害などが明らかになって、単に自然科学を押し進めるだけでは済まされないと考えるようになった。したがって、21世紀は、共生・共存を柱にして、科学・技術をどのように使うかを考える「こころ」の時代にしなければいけない。したがって、母乳哺育の子育てにおける重要性はさらに高まるものと思われる。

日本母乳哺育学会は、幸い、東京大学教授牛島廣治博士によって、21世紀冒頭に新しい体制で出発をすることが出来た。どうか、時代の要請に応えられるよう、多くの成果を上げ、このホームページが会員のコミュニケーションばかりでなく、親御さん特にお母さん、更には母乳哺育を研究している人の間でのやり取りの場になることを祈念したい。それは、「21世紀こそ子どもの世紀に」する道を開くものになるからである。

## 第 16 回日本母乳哺育学会を終えて

### 第 16 回日本母乳哺育学会会長 牛島廣治

第 16 回日本母乳哺育学会学術集会は平成 13 年 9 月 22 日~23 日に、東京大学弥生講堂において行われました。約 230 名の参加がありました。招請講演 1 題(健やか親子 21\_母乳哺育)、教育講演 2 題(母子接触と母乳分泌、母乳と生理活性物質)が行われ、特別講演(母乳哺育と国際保健)ではアジアからの講演者を含め 4 人の方に講演をしていただきました。シンポジウム「母乳はいつまで」では活発な討論が繰り広げられました。一般演題には 18 題の応募をいただきました。またポスターによる展示も行いました。会場外でも中での発表・討論の様子をわかるようにテレビ中継を行い、赤ちゃんを連れた会員にご利用いただきました。抄録集をご希望の方には実費でお分けします。弥生講堂は木をふんだんに用いた建物で、木のぬくもりと香りの良い会場で、手作りの会でありましたが、教室関係者の協力のおかげで無事に終わることができました。

## 日本母乳哺育学会理事挨拶 (50 音順)

### 合阪幸三 (御茶ノ水・浜田病院)

周産期管理に携わる我々産婦人科医にとって、主要な研究はどうしても妊娠、分娩管理が中心となる。子供を育てるという重要な時期であるにもかかわらず、産褥期に関しては助産師、看護師に管理を任せて、お座なりになっていた感は否めない。しかしながら 21 世紀を迎え、QOL の向上という点が医療現場でも追求されている現在では、産褥期、とくに母乳分泌、母乳哺育という子育てにとっての重要な営みに対して、産婦人科医ももっと関心を持つべきであろう。特に母乳哺育といえば、従来は科学というより情緒面からのアプローチが多く、「母乳分泌を科学する」という視点での研究があまり行われていなかったように思われる。日本母乳哺育学会は、この領域での我が国の先駆けであった母乳哺育研究会より発展したもので、本学会を通じて母乳哺育、母乳分泌に対する科学的なアプローチが期待される。広報担当理事として、ホームページ、電子メールなどの IT (information technology) 技術による広報、啓蒙活動に参加できることを喜びとしております。皆様よろしく願いいたします。

理事会の報告後3月には追加予定です。ご期待ください。

## 石井廣重 (石井第一産科婦人科クリニック)

静岡県浜北市で産婦人科を開院している石井廣重と申します。昭和51年順天堂大學を卒業しています。開院して15年になりますが、当初より個室の完全母子同室、母乳哺育を目指してまいりました。94年には個人の産科施設としては全国で初めてユニセフWHOのBFH(赤ちゃんにやさしい病院)に認定されました。母乳を薦めている産科施設はややもすると地域で孤立化する傾向があります。また、いろいろな問題のため母乳哺育を継続できない場合があります。これらの問題を解決するためにevidenceを示し、BFHが国内でもますます増えてゆくようお手伝いできればと考えております。このことが結果的に多くのお母さんたちが、自然に母乳で赤ちゃんを育てられるようになってゆくものと信じています。浅学非才の身でありますことは申し上げるまでもありませんが、よろしくご指導お願い申し上げます。

## 井村真澄 (東京医科歯科大学)

このたび初めて理事を務めさせていただきます、井村真澄と申します。現在、病院での母乳育児支援の実践、卒業後現任継続教育および複数の大学教育に携わっております。出産・育児をしようとする女性の多くは、我が子を母乳で育てたいと希望しているといわれています。このささやかで人間存在にきわめて本質的な願いを叶えるためには、産科施設や地域など母乳育児支援第一線の現場に、良質な研究に基づいた情報が提供され、「じつは母乳育児支援につながらない」ケアシステムや具体的援助方法が改善されることが望まれます。また同時に、母乳育児が困難なさまざまな状況の母子と家族に適切な具体的支援が提供されると共に、相手の気持ちに寄り添った十分なエモーショナルサポートが行なわれることも不可欠です。私自身は浅学かつ微力ではありますが、研究・実践・教育分野でご活躍の学会会員の皆様と力を合わせて活動して参りたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

## 小池通夫 (和歌山県立医科大学)

本学会の創設以来の会員です。遺伝子組み換え技術を駆使して製造した人工母乳を高性能の育児ロボットが抱いて与える子育て、私の一番想像したくない光景です。私は「母乳は生きている生物学的液体(breast milk is a living biological fluid)」と考え尊んできましたが、それ以上に「母乳は母と子を結ぶ絆」と信ずる者です。ヒトが哺乳類であり続けるつもりなら母乳育児は当然のことです。母乳の持つ抗菌力、プレバイオテックス作用、また栄養源として優れ、しかも今日でもまた毎年発見が続いており、いくら最新技術でも越えることができない、神秘的な力をもっています。また、虐待される児に母乳栄養児はまず見出せないのも新発見です。ヒトの子は哺乳類の一員として自らの母の胸に抱かれて育てられるしかないのです。世の中にはどうしても母乳が出ない母親がおられ、この様な話を書くのは残酷とさえいわれることもあります。しかし、その母と子にもどうしても母乳育児の楽しさを味わってほしいのです。私のもう一つの仕事に日本小児科学会の栄養委員会委員長(担当理事小林邦彦(北大))があります。同学会ホームページの栄養委員会の項にすでに遺伝子組み換え食品、プロバイオテックスが掲載されています。2月3日の委員会はテーマ「母乳育児」で橋本武夫(聖マリア)、水野克巳(千葉県子ども)の両氏の話提供で開催されます。

## 小林美智子 (長崎県立シーボルト大学)

日本が高度成長時代に突入し、女性が労働力として社会に駆り出され始めた頃、小児科医になった私にとって、「母乳哺育の推進」が結果的にライフワークとなりました。急性疾患から慢性疾患へ、病気も様変わりし、生活習慣病・心身症などが主流になってきてヘルスプロモーションの時代になりました。母乳哺育は生涯健康づくりの基礎になります。時代の影響を受けながらも普遍的な母乳哺育を総合的に学び、研究するために日本母乳哺育学会が発展していくことを願っています。今回、News Letterの発行と学会のhome pageが出来ますことは、21世紀に日本母乳哺育学会の輪が広がり、ますます発展するスタートとして期待されます。古くて新しい人類のテーマ「母乳哺育」を共通の課題として、様々な分野の人達がコミュニケーションできることを願っています。

## 根津八紘 (諏訪マタニティークリニック)

会の発足当時より理事を務めさせて頂いておりますが、実質的には名ばかりで、十分お役に立てずに参りました。私と母乳哺育との関係は、今から25年前の桶谷式との関わりから始まりました。当時、母乳哺育、特に乳房トラブルへの対応に関する成書が無いことにびっくりしたのが昨日のこのように感じます。たまたま母乳哺育と関わった医師としての責任から、解剖・生理・皮膚科・外科・小児科等、様々な分野の知識を包括し、最終的に「乳房管理学」という本にまとめたのは平成3年2月のことでした。母乳は出る人にとっては当然ですが、努力しても出し切れない人もいます。最近「母乳哺育にあらざるば、人間保育にあらざる」と言わんばかりの傾向が見られ、少し残念に感ずるところです。これからは母乳哺育に関わる助産婦と医師でペアーを組んだ「オッパイ110番」施設を増やして行きたいと考えています。会の一員として一生懸命お役目を果たして行きたいと存じます。

## 堀内成子 (聖路加看護大学)

聖路加看護大学で母性看護・助産学を担当しております。堀内成子と申します。このたび本学学長の常葉恵子理事が理事を退かれた後を引き継ぎました。母乳哺育を通じての、母親と子ども、そして家族の絆の形成は、愛情豊かでそれぞれに心身の成長をもたらす一大事業であると考えます。私は、看護婦・助産婦教育に関わる傍ら、母親と子どもの眠りに関する研究を10年来続けています。その結果から見えてくるものは、女性の営みの自然さや培われる能力の偉大さです。まだまだ解明しなければならぬ研究課題は山積みであり、助産婦の仲間と共にひとつひとつ探求していきたいと考えます。どうぞよろしくお願いいたします。

## 守田哲朗 (川崎医療短期大学)

わが国では、1955年頃から母乳栄養が急激に減少しました。1960年には、生後2~3か月までの母乳栄養の比率は約60%でしたが、1970年には約30%までに低下しました。しかし、その頃から母乳栄養の価値を再評価する動きがWHOを中心に世界各地で活発になりました。わが国でも1967年、小児科学会栄養委員会は母乳栄養減少の一因が施設分娩の増加と新生児室への粉乳の進出にあるとして、「新生児に安易な粉乳の使用は戒められるべきである」という委員会勧告を

公表しています。最近は、母乳栄養についての意識が向上し、妊娠中からの徹底した母乳教育や母乳育児の支援活動に加えて、母児同室制の導入や企業の自粛などがあり、母乳推進活動はますます盛んです。しかし、母乳栄養率は1980年から40%台にとどまり、一向に好転しません。これには成人T細胞白血病やダイオキシンなどの関与が大きいと思われませんが、医療従事者側にも今なお無理解のあることも指摘されています。今後とも新生児の初期にみだりに粉乳を与えることなく、母乳栄養(哺育)の確立に一段と努力を払わねばなりません。ご挨拶に代えて、一言申しました。

### 山城雄一郎 (順天堂大学)

母乳哺育促進と母乳の学術的研究が母児の健康の増進につながる事は誰も疑わない。ただ母乳哺育をやりたくても出来ない(出来なかった)母親に如何にして手を差し伸べるかも大変重要な問題であり、健全な社会の構築にはプラス面とマイナス面への配慮が必要と考える。極端な母乳哺育促進にならぬ様、理事会のメンバーの方々のご指導を期待したい。

### 戸谷誠之 (昭和女子大学大学院)

本学会の前身である研究会の時代に世話人の一隅に参画させていただいたのは1990年でした。当時、私は国立健康栄養研究所(現在は独立行政法人)において母子健康栄養部を担当し、以来今日まで乳幼児(特に低出生体重児)の発育と栄養に関する問題に関心を持って研究を進めていました。平成13年からは現職に移動しましたが、この研究は現在も継続しています。ご存知の方も多いと存じますが、近年低出生体重児割合が増加し、これらの子どもでは母乳哺育を受けている割合が少ないことが気掛かりです。栄養学的にも多くの優れた特徴を持つ母乳哺育の大切さが、より多くの関係者に再認識されることを願い会務に参加しています。

なお、2003年初秋に開催される第18回総会は昭和女子大学で担当させていただき予定で準備を進めさせていただきますので、ご意見、ご希望が御座いましたらお申し付けください。

### 第17回 日本母乳哺育学会のご案内

#### 第17回 日本母乳哺育学会会長 佐藤郁夫

この度、第17回日本母乳哺育学会を下記のごとく北関東・栃木県宇都宮市にて開催させて頂くことになりました。今回の学術集会のテーマは、「母乳哺育の更なる向上をめざして」とさせて頂きました。シンポジウムは、「母乳哺育推進のための秘けつとジレンマ」を予定しております。一般演題はテーマにとらわれず広く募集いたします。奮ってご応募、ご参加下さいますようご案内申し上げます。

日時： 平成14年9月28日(土曜日)  
13:00-17:00 学術集会  
17:10-17:30 総会  
総会終了後、懇親会を予定しております。

平成14年9月29日(日曜日)  
9:00-12:30 学術集会

場所： 栃木県総合文化センター  
所在地： 栃木県宇都宮市本町1-8  
TEL : 028-643-1000

連絡先： 第17回日本母乳哺育学会事務局  
自治医科大学産科婦人科学教室  
泉・山内・黒川  
TEL : 0285-58-7376  
FAX : 0285-44-8505

e-mail : [satoikuo@jichi.ac.jp](mailto:satoikuo@jichi.ac.jp)

### 事務局より：

#### 1. 返送された会員登録カードの集計

今年、事務局の移転にともない、会員の皆様に会員登録カードの記入をお願いしました。その結果を公にすることで母乳哺育学会の会員とはどんな人たちが多いのかを知ることができると思われますので、このページを借りて報告いたします。会員として登録されているのは男性148名、女性353名、団体1の計502名で、このうち本年の新規登録者は50名であり、また2001年度の会費納入者は218名でした。平成13年10月31日までの登録カードの返送者は205名で、この返送されたカードを集計しました。

職業(複数回答あり)

助産婦111名、医師58名(産婦人科17名、小児科38名、その他3名)、看護婦・保健婦7名、教育職8名、研究9名、その他4名、未記入13名

勤務先

病院(大学病院、個人病院含む)67名、大学など教育施設38名、助産所(開業を含む)38名、母乳育児相談室18名、企業16名、国・地方公共団体6名、各種団体5名、未記入17名

居住地

北海道5名、東北地方8名、関東地方98名、中部地方23名、近畿地方31名、中国地方11名、九州地方22名、韓国1名、

2. 新世紀である2001年にはさまざまな事件やおめでたいことがありました。事務局も新体制となり、皆さまにご迷惑をおかけすることもございましたが、2002年はよりスムーズな事務局運営を行いたいと思っております。会員の方には、母乳哺育に対するお考えの違いもありますが、各お考えを尊重しながら進めて行きたいと思っております。

### 事務局からのお願い：

母乳哺育の研究をより推進するための民間等からの共同研究ならびにニュースレター・事務局支援のための寄付およびボランティアを募っております。情報をお持ちの方は事務局へご連絡ください。

1) ホームページおよびニュースレター発行の準備が整いました。会員の皆様および理事の皆様からの原稿をお待ちしています。ご協力よろしくお願いたします。

2) 年会費の滞納が見受けられます。平成13年、12年、11年、10年に一度も納入いただけていない方には今後ニュースレターをお送りしない予定です。ニュースレター希望者および今後継続の希望者は是非会費を納入ください。

3) ニュースレターは年2回を考えています。学会案内と同封させていただき予定です。ホームページもあわせてご覧下さい。将来的にはインターネット使用が可能な方にはインターネットメール及びホームページでご案内させていただき予定です。

4) ニュースレターは、ホームページでもご覧いただけるよう、準備中です。また母乳哺育学会のメーリングリストを作成し、将来的にはご登録戴いた会員の皆様にはメーリングリストを介してニュースレターをお届けする予定です。

5) 母乳哺育学会のシンボルマークを募集しております。学会にふさわしい、かわいらしいイラストを事務局宛お送り下さい。

6) 今回は挨拶、連絡事項が中心となりましたが、次回より母乳分泌、母乳哺育に関する最新の研究情報を理事の先生方からご投稿戴き、掲載する予定です。皆

様からの投稿も歓迎いたしますので、事務局宛お送り するかどうかは、事務局の判断にお任せ下さい。  
下さい。メールでも可です。ニュースレターに掲載す

**編集後記：**

関係諸先生のお力添えにより、どうにか第1号の日本母乳哺育学会ニュースレターを発行できました。広報担当理事という大役を仰せつかりましたが、ホームページの作成、ニュースレターの編集など、IT技術はまだ未熟で、不完全なもの出来ておりません。学会の活動は、一部の理事で出来るものではなく、会員皆様のご協力があって初めて成り立つものだと思います。ホームページ、ニュースレターをご覧になり、お気づきの点、改良すべきところがありましたら、ご遠慮なくお申し出いただければ幸いです。会員の皆様のご協力で、正確で偏りのない情報発信基地としての学会の役割を果たしていきたいと考えております。(広報担当：合阪幸三 aisaka@air.linkclub.or.jp)



**日本母乳哺育学会事務局：東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻発達医科学教室**  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 Tel/Fax 03-5841-3629 E-mail: [hushijima-tky@umin.ac.jp](mailto:hushijima-tky@umin.ac.jp) URL: <http://square.umin.ac.jp/bonyuu>  
年会費：3000円 郵便振替口座： 00130-1-25808

発行者：小林 登 発行日： 2002.6.17

